

## 菊池川大河物語② ～菊池川と豊穰の実りの物語～

豊かな水の恵みにより作られた菊池川流域の米は、全国的にも高い評価を受けています。その歴史は江戸時代にまで遡ることができ、当時から「天下一の米」と称され、皇室や将軍に献上されていました。菊池川が度重なる氾濫で運んできた肥沃な土砂は米づくりに最適と言われ、古代から一帯は穀倉地帯となっていました。大宰府政庁を護るために築かれたと考えられる山城「鞠智城」がこの地に築かれた理由の一つには、城の眼下に広がる平野、盆地で作られる豊かな米との関わりがあったのかもしれませんが。

豊かに実る米は、菊池川流域の人々の暮らしや文化にも大きな影響を与えています。川の中流に位置する山鹿は、流域で収穫された米の集散地にもなり、大いに栄えました。街道には収穫された米を下流の玉名・高瀬まで運ぶための回船問屋や米問屋、酒蔵などが軒を連ね、住民たちは防犯のため街道の夜間通行を止める「惣門(そうもん)」を設置。火の番屋が置かれ、午前6時に門を開け、午後6時になると門を閉め、通行を許しませんでした。今では米蔵や味噌・麴店や酒蔵、惣門跡などを巡る「米米惣門ツアー」が行われ、観光客の人気となっています。

玉名・高瀬も米の積出港として大変な発展をとげた場所。年貢米を大阪堂島の肥後藩の蔵に運ぶための高瀬御蔵が作られました。菊池川流域周辺から運ばれた米は高瀬御蔵で量と品質をチェック。その後、俵を転がして船に運び込まれました。御蔵があった近くの民家の石垣には御米山床を作ったときの碑が残っているほか、高瀬御蔵には俵ころがし施設の遺構などが残されています。

江戸時代、食料としてだけでなく、貨幣的な役割を果たしていた米を増産する取り組みは菊池川の下流域にも広がりました。加藤清正は、現在の玉名市大倉あたりから南に曲がっていた菊池川の流れをまっすぐに付け替え、ところどころに轡塘(くつわども)と呼ばれる遊水地を設けるなどして治水対策を行うと同時に、有明海からの海水を防いで新田を開発。その後、横島干拓事業などにつながっていきました。

米の消費量は落ち込んでいる中で、上質な米、美味しい米へのニーズは高まっており、人気が高い菊池川流域の米や、その米を使った加工品や料理を味わうとともに、米にまつわる人々の歴史と暮らしに想いを馳せてもらうためのストーリーです。